

日本

日本の品質へのコミットメントは“天性”
だからこそ、日本は常に最大の努力を
続けています

キャップジェミニ株式会社
デジタルエンジニアリング & マニュファクチャリングサービス
ヴァイスプレジデント
望月 正彦

キャップジェミニ
デジタルエンジニアリング & マニュファクチャリングサービス
シニアディレクター
Vivek Jaykrishnan

World Quality Report

2020-21 | TWELFTH EDITION

日本では天性的に品質にこだわります。『World Quality Report』では、昨年に引き続き2020年もまた、世界の他の多くの国や地域では品質保証（QA）のソフトウェア開発ライフサイクルの主流への組み込みが進んでいることが指摘されています。しかし、日本では違います。日本において「品質」はあまりにも重要で、ひとつの概念という枠には収まりきれないのです。

今年の調査結果のデータを詳しく見る前に、指摘しておきたいことがもうひとつあります。それは、今年の調査の重要な要素であるtest automation – テスト自動化に関することです。この「automation」という言葉は、日本では二通りの意味で使われています。ひとつは、ロボットアームのような直接的な機械の自動化、いわゆるオートメーションです。もうひとつは、自動化のプロセスそのものを意味するのではなく、障害発生時に緊急停止措置としてオートマチック稼働する電気回路遮断、すなわち自動カットアウトのような回避を含んだ自動化です。

自信過剰ではない、 品質に対する日本企業の自信

日本の品質保持に対する高い意識は、テストング & QAの目的を見ても明らかです。回答者の93%が「エンドユーザーの満足を確保」するために、83%が「コーポレートイメージとブランディングを保護」するためにテストング & QAが不可欠であると答えています。このような高い数値から、日本では品質に対する全般的な期待が非常に高いことがわかります。IT戦略全体では、カスタマーエクスペリエンスの向上が再び非常に高いランクに入りました。これ以外の注目すべき促進要因がコスト最適化、Time-to-Marketの短縮です。これらの3つの基準を合わせると、標準的なQCT（品質-コスト-時間）トレードオフとなりますが、日本では常に品質へと重心が傾きます。

日本の回答者たちは、自社のアプリケーション開発の目標達成度に満足しているようです。たとえば、ほぼ4分の3（72%）が「必要なものをすべて常にカバーしている」、同じく72%が「使用する開発およびテスト

のツールおよびメソッドは常に十分かつ使用可能である」、さらに80%が「常に品質目標を達成している」と答えています。

私たちは、これらはすべて自信の表れであり、自信過剰ではないと考えています。日本は、新しいツールやアプローチを試すことに熱心な市場ではなく、利用可能な手段で最善を尽くすことを好む市場なのです。

日本人は失敗に対する嫌悪感を持っています。これは今回の調査データの驚くべき統計値に表れており、「テスト前に本番稼働することはない」の指標に対して同意した調査回答者は、グローバルでは約10分の1（12%）にとどまりましたが、日本では3分の2以上（69%）が、テスト前に本番稼働することはないという結果になりました。

この失敗に対する嫌悪感が「日本ですでに実証済みの技術を信頼する」という日本的決断を強固なものにしています。

さらに、日本人は「何をすべきか」をよく理解しています。回答者の4分の3以上（76%）が「全体のコードのうちどの程度の量のデータをテストしているのか常に測定している」と回答しています（この指標に対するグローバルの平均値は53%に過ぎませんでした）。

文化の問題

このように、日本人の「すでに試行され実績が確立したものに対する忠実さ」を考えると、アジャイルやDevOpsのアプローチの採用に関する限り、日本人がなぜ時代の流れに逆行する傾向にあるのかが理解しやすくなるでしょう。昨年、日本でアジャイル環境下でテストに費やされたプロジェクトまたはチームの作業は、全体の29%（平均）でした。今年はわずか18%にとどまっています。今年の調査でこの指標に関してこれほどまでに低下した国や地域は日本以外ありませんでした。

私たちは、アジャイルが単に日本の文化に受容されにくいのではないかと考えています。私たちは直感的に、日本はものの見方や考え方においてウォーターフォールに近いと感じています。日本では、新しいものに切り替

えるよりも確立された行動規律（ディシプリン）内で実装を改善する方が好まれるでしょう。

これがおそらく、日本の回答者の多く（57%）が「アジャイル手法に適合する優れたテストアプローチがない」と答えた理由でしょう。日本ではグローバル平均より高い43%が「アジャイルレイニアチブでのテスト作業の見積りが困難」だと答えています。これもまた同じ理由から来ているのかもしれませんが。

他とは異なるディシプリン

この記事の冒頭で、日本のビジネスにおける品質 – 品質がビジネスに遍在していること、そしてそれ自体がディシプリンを持っていることの重要性について言及しました。これがすぐに開発サイクルの品質以外の部分にシームレスに溶け込んでいくことはないでしょう。

興味深いことに、この見解は今年の調査データでも裏付けられています。日本ではソフトウェア開発の品質向上に常に徹底したフォーカスが当てられています。日本では回答者のほぼ3分の2（62%）が「テストをより効率的に行うためには品質チームが不可欠だ」に賛同していますが、調査全体の平均は40%に過ぎません。品質向上はすべての人に責任があるのかもしれませんが、日本の企業は今でも独立した品質チームを指定し、チームは重んじられ、高い評価を受けています。日本の調査では、すべての調査回答者が「少なくとも70%の割合で本番稼働前に品質をチェックする、独立した検証チームを保有している」と答えています。そのうちの4分の1以上（28%）は、100%チェックしていると答えています。これを世界全体の数字と比較してみると、同じく100%の本番稼働前品質チェックを実施していると主張する回答者はわずか3%しかいませんでした。

人工知能と自動化

実際のところ、今年の調査命題に対して100%の回答が出たのは日本だけでした。テストにおける人工知能（AI）および機械学習の活用に関連して、別の例を見てみましょう。日本では回答者全員が「自

分の会社に適した自動の根本原因分析を行っている」と答えています。私たちが現場でこれを目の当たりにしています。品質が最重要課題である場合、この種のスマートツールを活用するのは当然です。ここで、最初に述べたautomationの二つ目の意味が重要になってきます。停止の引き金となるようなことを望む者はいません。失敗は受け入れられないのです。

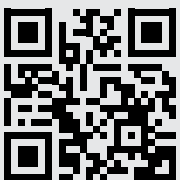
また同じ理由から、日本の調査参加者全員が「常に適切な自動化戦略がある」と答えるのは当然です。繰り返しになりますが、これは混乱や中断を回避するという意味での自動化であり、品質チームの権限を強化するディシプリンです。したがって、日本の回答者の94%が品質チームについて「テストアクティビティをより管理・制御し、透明性を高めることが最大のメリットのひとつ」と答えているのもそのためです。

断固たるフォーカス

このような管理の必要性は、「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）後の世界において、何が品質保証に必要となるか」についての日本の判断にも表れています。日本では回答者の89%が「品質チームの生産性監視を改善する必要がある」と答えています。全体ではその半分以上（44%）にとどまりました。日本の企業にとって、品質チームを常に最高の状態に保つことは非常に重要なことなのです。

今年のレポートでは多くの質問を調査対象者に投げかけましたが、日本に関しておそらく最も興味深く示唆的だったのが最後の指標 – COVID-19の結果として、QA & テスティングにどのような変化を想定しますか – に対する結果でした。ほぼすべての国と地域で圧倒的多数が「より強力なQAコミュニティの文化が必要」、「チームのコラボレーションツールの改善が必要」そして「さまざまなチームの仕事の質をこれまでとは違った方法で測定することが必要」に強く同意を示しました。

しかし、日本ではこれらに対する数値は極めて低いものでした。なぜでしょう – それは、日本がこれ以上品質を重視することができない国であり、もうこれ以上努力の余地がないからです。



www.worldqualityreport.com
または、QRコードを読み取り
レポートをダウンロードしてください。

キャップジェミニ株式会社
デジタルエンジニアリング & マニュファクチャリング
サービス ヴァイスプレジデント
望月 正彦
masahiko.mochizuki@capgemini.com

テストツールに関するお問合せ先:

マイクロフォーカスエンタープライズ株式会社
プリセールス統括本部 本部長
福田 慎
jp-info-enterprise@microfocus.com
+81 3 5635 0872



共同発行:

